

公園をみる・観る

= 見慣れぬ風景、新しい芽吹き =

3月5日、今年もヨシ焼きが行われた。ヨシ原面積4haのうち、今年は西側約2haが焼かれた。

一週間たった日曜日、焼け跡を見に行った。トンボロードから見ると視界をさえぎっていたヨシが焼き払われて、日ごろ目になじんだヨシ原とは少し趣が異なる景色が広がっていた。焼かれたところには、調整池から引かれた水の中にヨシの根株が点在している。その先約200m位のところから中央園路にかけて従来の枯れたヨシ原が見えている。焼かれた元ヨシ原だったところには、水面にヨシの焼け残りの株が顔を出しヨシ焼き後の黒い地面と、焼かれず残った枯れ葉色のヨシが織り成すコントラストから一幅の水墨画を連想する。この水は5月ごろから焼け跡に残った水性植物以外の雑草がなくなったのを確認して抜くことになっているので、この景色は今のほんのわずかな間しか鑑賞できない。

毎年、焼けたヨシ原を見るたびに、今年もまた新しい芽吹きの日を迎えた、春が来た、と心が弾む思いがする。ヨシは水を浄化し、生き物を育み、自然を豊かにする。

アシとも呼ぶがアシは「悪し」に通じると昔の人はヨシと呼び変えたとは周知のとおり。ヨシ原は焼かれることによりその生命力を強め、生き物たちの生息環境を整える。当公園のヨシ焼きも回を重ねて、今では春の訪れを告げるに欠かせない年中行事となった。2・3年前、ヨシ焼きの最中に公園に棲み着いているタヌキが跳び出してきて新聞記事になった



こともあるが、今年も2羽のキジが飛び出してきて樹林帯に消えた。また某飲料メーカーの環境保全活動としての応援があったり、宇部市の子ども会や鳥取県・米子水鳥公園の職員さんが見学にこられたりで話題に事欠かないイベントであった。

春から夏にかけての緑色のヨシ原、秋から冬にかけての枯れ葉色のヨシ原、そして今しか見られない水墨画を思わせるヨシ原。どれも公園にとって大事な宝物である。(土×土)